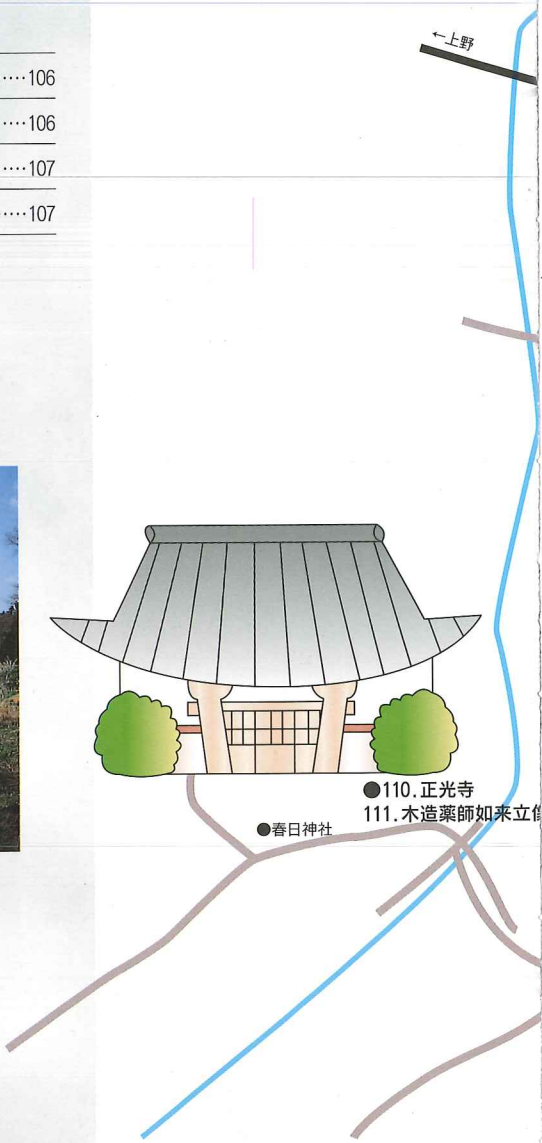
田園と住宅が調和したまち

【千代田地区】

108. 吉見台遺跡（吉見）……106
109. 甲賀神社の鹿面（羽鳥）……106
110. 正光寺（畔田）……107
111. 木造薬師如来立像（畔田）……107



津田沼
佐倉→
成田街道道標
成田・佐倉→
京成臼井駅
京成電鉄
市民音楽ホール
王子台小学校
臼井中学校
臼井老幼の館
間野台小学校
消防署
生谷青年館
臼井南中学校
染井野小学校
108.吉見台遺跡
農村協同館
成福寺
熊野神社
千代田小学校
老人いこいの家
万福寺
普門院
109甲賀神社の鹿面

108

吉見台遺跡（よしみだいいせき）

縄文時代中～晩期の集落跡であるこの遺跡は、印旛沼の南約2.5kmに位置し、付近は印旛沼に北流して注ぐ手繰川と鹿島川に挟まれ、印旛沼に向かって延びる標高20～30mの台地上にあります。

住宅地の造成に伴う発掘調査が昭和58年（1983）10月から実施され、調査によって検出された遺構は、縄文時代早期（約7,000年前）から各時代にわたっており、土器をはじめ様々な遺物が見つかっています。

遺構の中で特に注目されるのは大型住居跡です。これは、長軸19m、短軸16.5m、周囲75.6mのほぼ円形に近いものです。入口部分は南側にあり、主柱穴は８ケ所あり、支柱穴が壁面に沿って巡っています。

この遺跡の周辺は、現在新しい住宅地になり現代の人々の生活が営まれています。

109

甲賀神社の鹿面（こうがじんじゃ　ししめん）

羽鳥の甲賀神社は、集落を見おろす台地上にあります。境内はスダジイ・アカガシ・カヤ・スギ・クスなどの大樹が茂り、ほの暗い木影を形成しています。

創立年代は不明ですが、大己貴命（おおなむちのみこと）を祭神とし、明治42年（1909）に浅間神社（祭神木花開邪姫命（このはなさくやひめのみこと））と山神社（祭神大山祇命（おおやまつみのみこと））を合祀しました。

この甲賀神社には、県指定文化財の鹿面が伝えられています。面は長さ36cm、幅20cm、厚さ11cm、前頭部の長さ16.5cm、同幅20cmの大きさです。桐材の表彫刻し漆を塗り、裏はえぐり彫りとしています。元は動かすことのできる下顎が付いていました。

昭和40年（1965）頃までは村内の長男により、「ニニンダチ」が舞われていました。それは春秋の彼岸や例祭に、ひとつのかぶり物の中に二人が入って演じる神楽系獅子舞で、この古くから伝わる面は神前に供えられるだけであったといいます。

110

正光寺（しょうこうじ）

畔田にある正光寺は阿弥陀如来を本尊とする真言宗豊山派の寺院です。延文３年（正平13年、1358）の創建と伝えられます。鏑木町の大聖院の末寺でした。古くは字坊谷津にあったものを天保４年（1833）に現在の地に移したとされますが明らかではありません。

境内の薬師堂には木造薬師如来像が安置されています。この薬師如来像は「千葉県印旛郡誌」によれば、創建の際安置されたということですが、詳しいことはわかっていません。

111

木造薬師如来立像（もくぞうやくしにょらいりゅうぞう）

畔田（あぜた）の正光寺境内から本堂に向かって右奥にある薬師堂に木造薬師如来立像が安置されています。これは、檜材寄木造（ひのきざいよせぎづくり）で漆箔が施された高さ1.05ｍの仏像です。製作年代は、ふっくらした頬、胸部の厚み等に鎌倉時代の様式を残すものの、衣文（えもん）や全体の姿形からして室町時代の作と推定されます。

この像は渦巻状の縄を巻いたような形の頭髪を特徴とします。類似の仏像として、寺崎の密蔵院薬師如来像、臼井台の実蔵院阿弥陀如来坐像等があり、同じ系統の仏師の作と考えられます。

雨乞いの際に水をかけたようで、傷みが激しく、肉髻珠（にくけいしゅ）と、白毫（びゃくごう）、両手先、持物の薬壷、光背、台座は昭和62年（1987）に修理したものです。

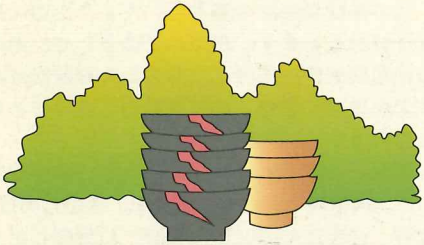
佐倉の昔話⑤

隠れ里

下勝田から直弥に通ずる道路の左側の水田に面したところに南向きの崖がある。その中腹に洞窟があって、俗に「隠れ里」と呼んでいる。あるいは八木房田まで続いているなどと言われるが、昔、夜更けて人が寝静まると、ここから米を搗く音が聞こえてくる。そして村人が什器の不足にこまるとき、そこへいって「お膳100人前、貸してください」といえば、翌朝は必ずこの付近に並べられており、使用後もとの位置にもどしておくと、いつの間にか見えなくなっている。まことに不思議なことだと伝えられている。しかも、これはかの天慶の乱（939）の落武者が隠れ住んで、なせる業だというのである。

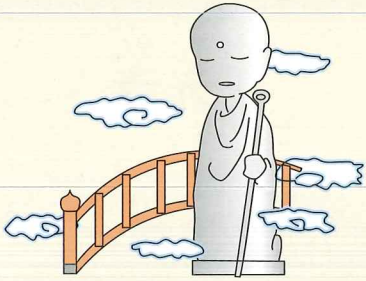
椀貸し伝説は「たんたん山」にも伝えられているが、これは、九州から東北地方まで広く分布している。しかも、狭い地域に相接近して伝えられているのが普通である。

そして下勝田では、旧家である八木の房田の背戸山まで通ずる地下道があり、たんたん山では、その御城の住人には普通の百姓は会えないのである。隠れ里と結びつく椀貸し伝説は、たまたま通行を許可された者が、たいていは家が富み、永く栄え、旧家として久しく家柄を誇るのがごく普通の形式であるが、ここではこの後の部分が忘れられてしまっている。



（佐倉市史編さん委員会発行『たんたん山』より）

佐倉の昔話⑥



仏も歩ませ給う

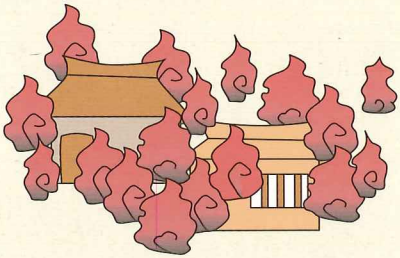
文禄２年（1593）酒井家次が城代というから、今からおよそ400年前、臼井城中より失火して円応寺が類焼した。この時、安置される運慶作、阿弥陀仏が、自ら田の中に飛んで来て難をまぬがれたという。この田が長慶谷津の阿弥陀田である。

また、天辺宝寿院の地蔵尊はこうである。すなわち、「地蔵尊縁起」に、

「その昔、応永の乱（1399）に高崎に兵火あるのよしを、地蔵尊老僧の姿にて、10日以前に３夜まで高声に触回りしかば、人々これを怪しみ、跡をしたいつるに、この寺に帰り給へり。果して兵火ありければ、諸人愛宕の本地仏となりとて信じ奉りき。其の後は、他所より火防の守札を乞ふ者多かりき」

とあり、３夜にわたって、兵火のあることを前触れして、わたり歩いたというのである。

これも「流れる仏」と同様、仏威仏力を畏れ、承認しようとするほかのなにものでもあるまい。



（佐倉市史編さん委員会発行『たんたん山』より）